

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	川内君に語る <故 川内且昭君の遺稿及び追悼>
Author(s)	横山, 正幸
Citation	広大言語, 6 : 72 - 72
Issue Date	1966-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046252
Right	
Relation	



われわれの言語学教室へ遊びに来るのではない。僕にはそう思えてならない。僕たちもまた君のことは終生忘れないであろう。（1966年10月）

「川内君に語る」

大学院教育心理学専攻修士一年

横山正幸

君がこの虚しい地上という舞台を去ってからはやくも八カ月が過ぎた。人間の存在が実に瞬間的な現象にすぎないことを君は俺にたたきつけるがごとく去っていった。今となっては何と言っても、何と考えてもしょうがない。だから俺はいまさら君に説教をしようなどとは思わない。俺は君の死を敬虔な気持で祝福したいとさえ思うのだ。靈魂が不滅なものであるなら君は何次元かの世界でいまこそ真の生命の充実を感じているのではあるまいか。君はもう自由なのだ。何ものもはや君を苦しめ、悩ますことはできないのだ。

それにしても、こうして君に語りかけていると無性にかつての事が思い出されて悲しい。

過去を回想することは残された者の勝手な感傷かもしれない。だが無性に思い出される。

俺たちはよく議論したものであった。似島を一周しながらの議論、一軒、二軒、三軒と空が白むまで壘台を梯子しての議論、方言学、哲学、マルクス、人生論……

君はどんなに酒がまわってもカードに書くのをやめなかったものだ。俺はあれには感心したものだ。三年の秋、俺たちはかつての方言調査で知った人に招待され、山県郡の大朝町に神楽を見に行った。神楽はいまも雪の降りだしそうな寒い夜に行なわれた。ウィスキーを飲みながら観覧した農村の素朴なそれは深い感動を俺たちに与えた。

あの日からであった。あの時からであった。君が何か苦しんでいるのを俺が知ったのは。それから一年余の後、君は自分の死を俺に予言して死んでいった。

俺たちの論じあった多くの問題について何らの答をださないうちに君は逝ってしまった。いやそれが答えであったのかもしれない。君の肉体は確かにこの地上から消えてしまった。しかし川内という一人の青年がかつていたという事実は、少なくとも俺がこうしている限り誰も否定することは出来ないのだ。